

W.B. イエイツ：  
『幼年期と青春期の回想』<sup>1</sup>  
XIV～XXIV

日 下 隆 平

XIV

<1881年ホース岬の新居><sup>2</sup>

少年の生活において大きな出来事は、性への目覚めである。少年は一日に何度も水浴びをしたり、夜明けに起きて服を脱ぎ2脚の椅子に渡した棒を繰り返して飛び越えたりする。彼は自分が裸でいることに快感を持ち始めているなどとは決して知ることもなければ、それを認めようともしない。何かの夢が自分の変化を気づかせるまでは、少年は自身の変化に気づくこともない。少年は自分の心の中の大きな変化をたぶん決して理解しないことだろう。

貝が破裂するかのようにそんな気分になったのは、わたしが17歳のときだった。幼く見える田舎の少女たちでさえ、そんな時期を迎えると、強い欲望を押さえようがなく、ポルターガイスト（騒霊）を真似て、皿を投げてみたり、自分の長い髪を引っ張ったりもした。ときには、彼女たちは霊媒のごとく本物のいたずら霊の声を伝える者になることもあった。思い出すに、わたしの情熱、恋、絶望は、わたしの敵、心配事、非難などよりもずっと甘美に思えて、それらに自分の関心をひたすら注ぐことになった。今になって初めて気づくことだが、ひとりの時に見たことのほうが、仲間とともに見たこと、したことよりも、記憶のなかでずっと鮮明に残っている。

ある牧夫がわたしに断崖の小道の真下、約150フィート、海拔2,300フィー

トの所に洞窟があるのを教えてくれた。彼が言うには、15年程前に亡くなったマクロムという追い立てを受けた小作人が、そこで何年間も住んでいたということである。おそらくは風雨をさけるために木製の囲いを固定した錆び付いた釘が、岩に打ち込んであった。ここにわたしは缶入りココアとビスケットを保存していた。そしてベッドに入る代わりに、暖かい夜に家を抜け出して蛾の採集を口実にその洞窟で眠ったものだった。そこまでの岩棚は、高い場所がよほど苦手な人でなければ怖くない程度のものであった。だが、上から見ると、岩棚の道は狭く勾配があるように見える。だからよそ者が、その岩棚の小道をのぼっていくわたしの姿を見かけて、注意してくれたときなどわたしの喜びはいやにも増した。しかし公休日に洞窟に恋人のカップルを見かけたときには、身をかがめるようにして焚き火にあたるマクロムの亡霊が夜明け前に入り口にいたという話を聞き、ようやく気持ちがおさまった。何かの本で読んだように、わたしは火を焚いた地面の下に卵を埋めて料理しようとした。

普段、私はホース城周辺の荒れ果てた庭地にあるシャクナゲと岩の間で眠ったものだ。しばらくすると、父親に夜の半分ぐらいいは室内で過ごすようにと注意された。父が言いたいのは、わたしがベッドで少しは睡眠をとるようにということであった。しかしわたしは、いったんベッドで寝てしまうと、眠りから覚めないのと心地よさで、もう一度夜半に起きるなんて自分には到底できないことを承知していたので、夜半過ぎまで台所の火で身体を暖めて過ごしたものだ。誇張されたうわさが学校中に広まり、あるとき、わたしがうまく答えられないでいると、ある教師がわたしの夜の過ごし方を冷やかしたことがあった。わたしの科学への関心は急速に薄まりつつあった。やがてわたしは「科学はまったく間違いだった」とまで思うまでになったのだ。まもなく自分の標本にも興味を失い始めたし、長年かけて収集したところで、知り得たことは何もなかったとまで思った。スライゴーの聖ヨハネ教会で初めて耳にした聖書の一節を思い出しては、わたしはそれだけの苦難を体験しているのだと信じるようになった。そしてヒソップ（清め）と木の知識をも

つ賢王ソロモンを真似ることで、わたしは自分自身の知恵を確信しようとした。なお、わたしは（採集用の）緑の網を持っていたが、一方では賢者、魔術者、詩人ごっこをして遊ぶようになった。わたしには、多くの偶像があった。だから、狭い岩棚を登ってゆくときは氷河のマンフレッド（バイロンの詩劇）であり、孤独なランプを携えた『プリンス・アサネイズ』<sup>3</sup>でもあった。しかし、やがてわたしは自分の指導者にアラスターを選ぶと、彼の哀愁を分かち合いたいと願うようになった。彼が大樹の間をとうとうと流れる河をボートで漂うように消えてしまうときには、わたしも最後にはみんなの視界から消え去りたいと思った。わたしが女性を思い描くとき、彼女たちはわたしの好きな詩人たちが描く人たちのこともあれば、短い悲劇のなかで愛される人たちのこともあり、また『イスラムの反乱』（シェリー）の少女（Cythna）のような女性たちでもあった。彼女たちは荒野を恋人と共にゆく、家もなければ、子もない何者にも縛られることのない気ままな女性たちであった。

## XV

### <父親の影響>

わたしの思想に対する父の影響は、この上なく大きくなった。毎朝、電車でダブリンに通い、父のスタジオで朝食をとった。父は、ヨーク街のフラットにある美しい18世紀風の暖炉のある広い部屋を借りていた。朝食のとき、父は詩人の一節を読んだけれが、それらは劇や詩の中のもっとも情感の高まる場面であった。彼は思索的な興味から作品の一節を読んだけれたのではなかった。そしてどんなに熱烈なものであっても一般的なものや抽象的なものがある詩を好まなかった。彼は『縛りを解かれたプロメテウス』の最初の一節を朗読してくれたが、決してあの有名な第4幕の荘厳なリリズムを読むことはなかった。また別の日にはコリオレーナス（シェークスピアの史劇の主人公）<sup>4</sup>が敵将オーフィディウスの館に逃げ込んで、生意気な召使いに、自分の家は大空の下にある（彼がローマを逃げてきたことを意味する）と言

う場面を読んでくれた。それ以来何度となくわたしは『コロオレーナス』の舞台を観てきたし、一度ならずその作品を読んできたものだが、その中でその場面は全ての場面でもっとも鮮明である。わたしが耳にするのは父の声であって、アービングやペンソンの声ではない。父が美しい叙情詩の一節として好むものは、端正な美の背後に生身の人間を感じるものであった。だから父は好ましい、身近な生き方を示すものを常に求め続けていた。精霊たちがマンフレッドを愚弄して歌いながら迎えると、マンフレッドは「甘く物悲しい響きだ」<sup>9</sup>と応じる。このとき、その精霊の声には、怒りを見せるときであっても精神的な美しさが感じられるはずだと、父は言った。父は抽象的ではないという理由で、シェリーよりもキーツを偉大な詩人と考えていた。しかし父はキーツを読んではいなかった。絵画の影響から今日になって評判となったもっとも美しい詩でさえ、あまり関心を持っていなかったと思う。何よりも大切なのは、理想的な言葉であり、情熱的行為、夢のような空想におけるものでなければいけなかった。瞑想を好む人たちは、互いの生活そのものを過大に評価するものだ。作家という人種も、偉大な詩人を除けばその類なのだ、と父が語ったのを思い出す。振り返ると、わたしは父の精神を断片的に見てきたようだ。実はその隠れた断片には関連するものがあったのだと、ようやく今になってわたしは気づき始めたところである。彼はヴィクトリア朝の観念的な詩と、ある詩の一節と何編かの詩を別とすれば、ワーズワースも好んでいなかった。ある朝、父は朝食を取りながら、彼が今肖像画に描いている高齢で、とても尊敬されている牧師でもあるワーズワース学者の顔の中に、懸賞目当てのボクサーのような動物的本能を見いだした、と語ったことがあった。父はラファエロの形式美を嫌い、その沈着さを整然とした情熱ではなく偽善とし、快樂と放縦に耽ったことから、ラファエロの生涯を批判した。文学では、父はいつもラファエロ前派の立場であり、それを文学の原則とした。王立美術院がなお力をもつ間に、王立美術院の形式を初めて批判した。

父が物語を読んでもくれることは、そのうちになくなった。父と議論はした

が、そのほとんどは文体に関してであった。

## XVI

### <詩の修業>

わたしは他人の家に儀礼的な挨拶に行くとき、また訪問するときなどに、とんでもないヘマをやらかし始めた。だから子供の頃から知っていて好きだった女性には、「ますますひどくなったわね」と言われたものだ。わたしは賢くて雄弁でありたかった。若き日のアンペール<sup>6</sup>に関するあるエッセイを読んで、こんな思いは救われた。そして独りになったとき、じぶんの失敗をことさら大げさに考え、惨めな気持ちになった。わたしはシェリーとエドモンド・スペンサーを模倣して詩を、彼らを手本に劇を書き始めた。——というのは、父は何よりも劇詩を誉め称えていたからだ。——そしてわたしは空想的でまとまりのない物語を創った。わたしの（詩の）一行はごくまれにしか韻を踏まなかった。というのも書物にある韻律法がよく分からなかったからである。とはいうものの、行単独では音楽性のある詩が多かった。わたしは詩を創るときゆっくりと詩行を口に出して書いたが、誰かに朗読したとき、音節の強弱が共通した音楽性がなく韻律法がないということによく気づいた。その一方で、心を奪われるのはいつも何かを観察している時間だった。蛾の採集をしなくなってもなお、わたしは移りゆくものすべてを観察していた。小さな蛾が日の暮れる頃にあらわれると、その後大きな蛾が夜明けまで群れていて、日が明ける頃にはまた小さな蛾の一群が現れる。そして鳥はどこから見ても眠っているのに、夜さえずるのだ。

## XVII

### <スライゴーの叔父の家>

わたしは休暇になると、今でもスライゴーの叔父ジョージ・ポレックスフエンの家に行く。彼はバリーナからすでに引退していたわたしの祖父の地所を譲り受けて住んでいた。祖父はもう大きな館を所有していなかった。彼の

共同経営者ウィリアム・ミドルトンはこの世から去り、祖父には訴訟問題が持ち上がっていた。彼は昔のように裕福ではなかったし、子供達は結婚してそれぞれ別に暮らしていた。祖父は港を見下ろせる背の高いがらんとした家を持っていた。仕事といえば、せいぜい船の管理が誤ってなされていないかどうか、安い石炭を燃やしていないかどうかを蒸気船の煙で判断し、それが分かったときにひどく叱りつけること、また自分の墓石請負業者の監督をつとめるぐらいのことだった。ミドルトンの墓と何人ものミドルトン家代々の名前が書かれた家の壁があった。そして、ボレックスフェン家の名前を入れるための空白部分があった。だが、祖父はミドルトンのことが好きではなかったので、「昔の骨と一緒に葬られるのはごめんだ」と言っていた。すでに新しい墓石の石の囲いに大きな金箔文字で彼の名前が彫られていた。彼はほとんど毎日聖ヨハネ教会の境内で散歩を終えた。というのも、祖父はその場所が甲板の上のようにすべてが整然とし簡潔であるのが好きだったからである。彼が自分で墓石を監督しなければ、請負業者が余分な装飾を施したことだろう。一方で、彼にはまだ昔のままの腕前と気力があつた。小型商用蒸気船に乗り、ローシズ岬に行こうとしていたときのことだった。祖父は舵手から舵を代わると海峡の岸壁の狭間を抜けて浅瀬を横切るといふ、前例のない航路をとった。そして最後にはローシズ岬の波止場沿いを、いつものジグザグ進路やロープ牽引をしないで、鮮やかな舵取りで進んだ。祖父は風邪を引いたときには嗅ぎたばこを嗅ぐ他は、煙草もアルコールも嗜まなかった。18歳になったとき医師がアルコールを勧めたことがあつたが、「悪い習慣を身につける気はない」と答えたという。

わたしの弟は祖母の愛情をわたしに代わって独占していた。彼は祖母の家で当時何年間か生活し、スライゴアの学校に通っていた。彼の成績はクラスのビリだった。祖母は気にかける様子でもなくこう言ったものだ。「あの子は優しすぎるから他の子を追い抜けないのよ」と。彼は暇なときは、水先案内人や水夫の子供達である大勢の少年たちと彼らの好かれるリーダーとしてあちこちに出掛けたり、ロバのレースを取り仕切ったり、縦2頭に引かせる

ロバ競技をして過ごした。それらの競技は、少年達が強情であったために、知力を求められることだった。そのうえ、弟は絵でみんなを楽しませ始めた。彼が描いた絵画のうち半数も見ると、わたしはローシズ岬やスライゴー波止場で出会った人々の顔が浮かび、今日でも誰だか分かる。弟が住んでいたのはずっと以前のことであるが、彼の記憶は目に浮かぶほど正確に思えるのだ。

ジョージ・ポレックスフェン（1839-1910）は性急な彼の父親（ウィリアム1811-92）に較べて我慢強い性格だった。そしてまたそれは彼の持って生まれたものであった。彼は、年を重ねてからも裕福であったが、青年時（の出発したとき）と変わらず、心が安らぐことのない生活をしていた。小さなものであったが家を持ち、年老いた何でも屋の執事と馬丁がいた。彼は毎年のように多少快活さを失い、調べると彼には身体が受けつけない食物が少なくともひとつはあった。心気症（ヒポコンデリー）だった彼は、冬から夏にかけて、いつもするようにウールの服の重さを計った。ジョージは少年の頃からその日にやってきたように、4月か5月の定まった日に、服の正確な重さを計り着る服を決めてきたからだ。彼は楽しい知らせにさえ気持を減入らせる原因を見つけた。例えば6月22日の夏至には日が短くなるのを嘆くというように、彼は憂鬱な気分で暮らしていた。のちになって、わたしが夏の盛りの真昼に汗ばんでダブリンで彼と会ったときのことである。わたしは彼をキルデア街の図書館のホールに誘った。そこは涼しく陰った場所だったが、彼の気持ちを明るくすることはなかった。そのとき、彼は沈んだ口調で「ここは冬さぞ寒いのだろうな」と言っただけだった。ときには、朝食の席で陽気なわたしと陰気な彼とは際だつ対照をなした。ジョージに「才能、物覚え、健康のどれもまだまだご健在ですね」と言うと、「20年もすれば、すっかり老け込んでるさ」と言う彼のひと言にわたしは二の句が継げなかった。だが、活力が枯渇しているかに見えるこの不活発な男にも、美しい思い出はたくさんあった。彼に起きたことのひとつに恋愛事件がある。それほど熱烈なものではなかったが、彼の道を誤らせるものとなった。そしてもうひとつは青年時代の航海である。祖父がジョージをスペインの港までスクーナ船で送り届

けたことがあった。その港では、船荷取扱店はオニールという名のふたりのスペイン人が経営していた。かれらはジェームス1世統治のとき、アイルランドから逃げ出したティローン伯爵、ヒュー・オニールの子孫だった。かれらのアイルランドとの貿易は、かつてゴルウェーを富ませたスペインとの貿易を彷彿とさせるものであった。何年かの間、祖父とスペイン人のふたりは連絡を取り合った。というのは、かれらは出自の記憶を大切にしてきたからである。あるコノートの埋葬地で、祖父は会葬者がひとりだけの子供の葬式に偶然出会った。その会葬者は気品があり、一目で外国人と分かった。その男はオーストリアの伯爵で、古い貴族であったが、彼はこのたびもオーストリアの由緒ある貴族であるアイルランド一門の最後の者を埋葬するために来たのだった。その一門は亡くなると、いつもその朽ちかけた出身地の墓地に埋葬されてきたのである。

叔父はほとんど獵を止めていたが、まもなくすっかり止めてしまった。かつて、彼は障害物の馬術競走に出ていた。調教師が言うには、彼はコノートで最高の乗り手だった。ジョージには確かに馬に対する豊かな知識があった。というのは、離れた別の州にいても、彼がバリーナには魔法を使うかのように馬を治したという噂を、わたしは聞いたことがあったからだ。しかし、彼は病気の見立てで確かなものを持っていたに過ぎない。一方で、夜は占星術と魔術に没頭していたとき、昼間はまるで上の空だった。彼が若いときから彼に仕えた使用人メアリー・バトルは透視力の持ち主だった。そしておそらくそのことが、彼を不可思議な研究に向かわせたのだろう。ある朝、メアリーは彼に洗ったばかりのシャツを持って行こうとして、思いとどまった。彼女は、シャツの胸に血がついているから、別のものを持っていくと言った。ジョージは事務所に行く途中で、低い塀を越えようとしたところしくじって怪我をしたため、リネンのシャツに血が付いてしまった。なんとそこは、朝、彼女が血を見つけた場所だった。夕方になって、メアリーは、血に染まったと考えたシャツの汚れがまったくの見間違いだったことに気がついた。彼女は読み書きこそ知らなかったが、彼の陰気さに陽気さで対応したその気質に



は、あらゆる類いの昔からの言い伝えと不可思議な信仰であふれていた。わたしの『ケルトの薄明』の大半は、彼女がふだん語ったことをまとめたものに過ぎない。

わたしの叔父は、スライゴーで珍しく民衆から尊敬を集めていた。叔父は強い感情を露骨に示すのは、自分の心の内面を見せることになると考えたのだろう。彼はそれぞれの地位や財産に関係なくみんなに敬意を払って礼儀正しく接していた。そして従業員の間に、ちょっとした軍隊が船におけるような規律を守らせていた。例えばもし荷車運転手がしくじったとしても、彼は運転手を解雇するようなことはしなかった。彼を呼びにやらせると、彼から鞭を奪い取り、それを壁に掛けた。そしていわば「違反者」を何ヶ月かの間は降格させたが、その後また元の地位に戻し、鞭も返したものだ。勤勉で几帳面なこの男は、冒険心こそなかったが、豊かな内面性を持っていた。アイルランドでかなりの額となる彼の富は、兄弟、つまりパートナーの才能に由来すると述べていた。この男はわたしの少年時代の気まぐれな行為や空想を打ち明けられる友であった。

わたしが以前に読んだある本をそのまま受け売りして、人は夜の田園を見て初めてその風景を理解するものだと言っていると、(時間を過ぎると彼はいつもすぐに寝ついていたものの) 彼はうれしそうな表情を浮かべた。というのは、彼は自然の風物をこよなく愛し、タゲリ(チドリ科の鳥)の2つの鳴き声さえ知っていたからだ。一つは鳥を自分に近づける鳴き声であり、もうひとつは遠ざける鳴き声であった。だからこそ、わたしがジル湖の周辺を歩き回り森で眠ることになるかもしれないと彼に言ったとき、彼は許してくれたわたしの都合のいいように食事の準備をしてくれたのだ。わたしは彼にすべて目的を語ってはいなかった。新しい計画を持っていたからである。父は『ウォルデン』から一節を読んでくれたことがある。そのときからわたしはいつかイニスフリーという小さな湖島に小屋を建て住んでみたいと思うようになった。イニスフリーとはわたしが一晚眠る予定のスリッシュ・ウッドの反対側にある。

わたしは肉体的な欲望と女性や愛に対する性質を克服したので、ソローのように知恵を求めて生活したいと考えた。その地方の歴史に、その島でかつて生育していた樹木に関する物語があった。それはある恐ろしい怪物によって守られ、神々の食べ物を実らせる木であった。ある娘がその果実をほしがって、恋人に怪物を殺してそれを採ってきてほしいと頼んだ。彼は言われた通りにしたものの、誘惑に駆られてその果実の味を試してしまった。その結果、彼は娘の待つ所に戻ったときには強力な効き目故に息も絶え絶えのありさまだった。そして悲しみと悔恨から娘もまたそれを食べ、死んでしまったという。わたしが行こうとしたのは、その島の美しさのためなのか、またはその物語のためなのかは覚えていない。しかし当時わたしはまだ22、23歳の若さであり、夢を諦める年齢ではなかった。

わたしはスライゴーから夕方の6時頃ゆっくり歩いて出発した。わたしは夕暮れの美しい時間を楽しみながら進んだ。就寝する時刻にはスリッシュ・ウッドの森にかなり足を踏み入れていたが、寝るわけにはいかなかった。寝場所として選んだ乾燥した堅い岩が不快だったからではなく、森林監視員の目を恐れたためである。本当だとは思えなかったが、誰かが不定期に森林監視員が回ってくると話してくれたことがあった。わたしは見つかる、なんと言えよいかを考え続けたが、監視員が信じてくれるような口実を思いつかなかった。しかし薄明どきに、わたしは島を見て鳥の近づく声と離れて行くときの声に気づくことができた。ところどころ泥濘のでこぼした道を約30マイル歩き、想像し難いほどの疲れと眠気をこらえて、わたしは翌日家に帰った。その後何ヶ月かたって、わたしの冒険のことを話すと、叔父の使用人はどっと笑ったものだ。(メアリー・バトルではなく別の使用人である。メアリーは徐々に回復しつつあったが、病気のためしばらく暇を取っていた) その使用人は、わたしが(大っぴらにできない)理由でその夜を過ごしたために、叔父を騙す口実に言っているだと思っていた。だから彼女は、老女中のようにわたしが取り澄まして真実を隠しているのだと思いこみ、「お疲れになったことでしょう」とからかい半分に言ったことにはたいそう驚いたも

のである。

かつて1年のうちの何ヶ月かを、叔父の滞在していたローシズ岬にある叔父の別荘にわたしも泊めてもらっていたとき、わたしは深夜に従兄弟を訪ねて彼にヨットを出して欲しいと頼んだ。わたしは夜明け前に海鳥がかき立てる想像力をどうしても体験したかったのだ。彼は憤慨して断った。また、彼の姉が会話を耳にして階段の上に来て、彼に出かけてはいけないと言った。しかし従兄弟は悩んだ末に、台所にいる者に向かって大声で長靴をとってくれと頼んだ。従兄弟はわたしと薄暗い中を出かけた。彼には人望があったので、彼のことをわたしのように頭が変だと言うような者は今までのところ誰もいなかった。わたしたちは眠気の覚めない村の小僧をベッドから連れ出して出航した。従兄弟は魚をとれば気持ちが変わる（格好がつく。まともに見られる）と思ったので、わたしたちは流し釣りをした。ところが風が弱まり、わたしたちの船は止まってしまった。わたしは体を主帆でくるみ眠った。わたしは当時どこでも寝ることができた。夜明けが近づく頃目覚めると、従兄弟と小僧がポケットをひっくり返してお金を探していた。そしてわたしは自分自身のポケットも引っかき回さねばならなかった。ラフリーから魚を積んできた一艘の船が通りかかっていたので、二人は少しばかり魚を買って釣ったように見せかけたかったのだ。しかしわたしたちのポケットは空っぽだった。わたしは詩に鳥の声を取り入れたいとかねがね思っていたのだが、15年後、『影なす海』として実を結んだ。最初に思いついた頃に詩にしていたなら、もっと観察を活かすことができただろう。子供時代のわたしを感動させてやまなかった風に揺らぐ光を、わたしはその時再び見つけたのだ。わたしには夜明けへの情熱があるのだと信じていた。そしてこの気持ちは、大げさに遊ぶ子供劇のようにとても芝居がかったが、本物の瞬間をも持っていたのだ。後年『オシーンの放浪』を書き終えたとき、わたしは黄とくすんだ緑に満足ができなかった。それらはすべてロマン派の運動から継承した誇張した色彩だった。それ故わたしは慎重に自分のスタイルを作り替え、慎重に冷ややかな光とたなびく雲のような印象を探し求めた。わたしは伝統

的な比喩を捨てリズムの規則を緩やかにした。そしてわたしにはアイルランドに由来するものと思えていたものは、すべて違っていて馴染みのないものであること、英語はこの上なく情熱的なものであるが、その感情はわたし自身にとって冷ややかなものなのだとこのとき知った。ある精神的状況を象徴し、猫にとっての鹿の子草<sup>8</sup>のように、飢えに目覚めさせる風景があるに違いないと、画家の息子が信じ込むのは当然のことであった。

## XVIII

### ＜父のデッサン＞

わたしは、父親の初期の頃のデッサンのひとつに示されている寓話に関する長い劇を書いていた。ある王の娘が子供時代に、庭の上で燦然と輝く空に見える神を好きになってしまった。彼女は神に相應しくなろうと、永遠の命を手に入れるために、人への哀れみの気持ちも失い罪を犯す。そして人を殺してとうとう王位につくと、彼女のご機嫌取りの部下に囲まれて神が来るのを待った。そのうちに家来はぞくぞくするような寒気を感じ始めると、ひとりずつ死んだように活気がなくなっていった。神の姿は彼女以外の者には屋敷の中では見えなかったからである。やっと、神が彼女の足下に来ると、彼女、つまり彼女の魂はもう一度庭に戻り赤子のようにおしゃべりをしながら死んでいった。(いったん手に入れてしまうと、たとえ神であっても憧れの対象ではなくなる。手に入らないからこそ、人は憧れることの寓話)

## XIX

### ＜近港のミュージックホール＞

あるとき、従兄弟と船に乗っていると、一緒に乗っていた少年が近港のミュージックホールについて、その女性が男たちにどんなことをしてくれるかを話していた。彼の話しぶりは、まるで王侯貴族の情婦を称えるかのように、誇張し、高級娼婦の名を真似てその女性にシバの女王（魅力的な女性の意）とか都市の名を付けていた。

別の日のこと、その少年は従兄弟に沿岸を50マイルほど帆走して小さな家が建ち並ぶ辺りで停泊して欲しいと頼んだ。彼が聞いているところでは、その家に行けば娘たちが「大いにもてなしてくれるはず」だった。彼は興奮して懇願（目が輝いていた）したが、わたしたちを説得する見込みはなく、ただ生きることと性についての途方もない空想話をするばかりだった。

叔父の馬の調教師で騎手でもあった或る青年は、馬具室の暖炉の前で七面鳥に糸を巻きつけてクリスマスディナー用に料理している間に、不道德なイギリス人のことを話してくれたことがあった。彼は競馬に行ったイギリスでふたりの領主に会った。ふたりは、休暇でヨーロッパに出かけるとき、「いつも互いの妻を交換していた」という。彼自身、或る女性の誘いを受けたことがあったが、スカブラリオ（カトリック教徒が信仰のしるしとして平服の下に肩から提げる2枚の羊毛の布きれ）に偶然触れると、直ちに空中で天使が白い翼を羽ばたかせるのが見え、女性の誘いを断ったという。わたしはその後彼と会うことはなかったが、叔父から彼が馬に関することで何か不名誉なことをしたという話を聞いた。

## XX

### <女性の友>

わたしはホース岬の丘を登ろうとしていた。後ろで車輪の音が聞こえると同時に、わたしの傍らで小型馬車が止まった。可愛い娘がひとり帽子も被らずに乗っていた。その後、彼女とひんぱんに会い、まもなく恋心を抱くようになった。しかし彼女は婚約していたので、わたしは自分の気持ちを語ったわけではなかった。彼女はわたしを信頼できる友として選んだのだった。だから、わたしは彼女の恋人と彼女の口論についても悉く知っていた。数度、彼が彼女との婚約を破棄すると、彼女は病気になってしまい、友人たちが仲を取り持たねばならなかった。時として彼女は日に三度も手紙を書いたものだった。しかし彼女は友人の助けがなければとてもそんなことはできなかった。彼女は激しい性格の女性であり、物真似がうまく、ほとぼしる宗教的感

情に身を任せた。司祭の説教を聴いているうちに、彼女が涙を流し、自ら罪深い女と思うと、そのあとで説教を物真似して笑っていたことも知っていた。わたしは下手な詩を何編か書くと、彼女の婚約者への腹立ちで、一度ならず眠れぬ夜を過ごした。

## XXI

### <伝承物語>

バリソデアで幼年期の迷信にわたしを連れ戻す出来事が起きた。それがいつのことかはっきりしない。というのは、この時期の出来事は幼年期のものと同じように、理路整然としたものではないからだ。わたしはアベナ・ハウスに従兄弟たちと滞在していた。二、三歳年上の青年、わたし、わたしと同年の少女、それに多分かなり年上の彼女の姉妹たちとである。同年の従姉妹はバリソデアとローズ岬で彼女が見た不思議な光景のことをわたしによく話してくれた。例えば背の高さが3、4フィートでステッキをついた老女が一度窓のところにやって来ると、従姉妹を覗き込んだことなど。また、従姉妹が道を歩いていると、路上で出会う人の家族の名を一人ずつ言って「誰それさんはお元気？」と挨拶したものだった。従姉妹は、なぜかは説明できなかったが、あの人たちはこの世の人たちではないということが分かっていた。あるとき、従姉妹は歩き慣れた野原で道に迷ったことがあった。何とか道を見つけたとき、彼女の持つお兄さんのステッキに付いていた銀細工が消えてしまっていた。村の老婆は後で「あんたはあの人たちの中にたくさん友達がいるから、あんたの代わりに銀が持って行かれたんだよ」と話してくれた。

何年も前のことであるが、これからわたしが語ろうとすることは正確を期さねばならない。なぜなら、比較的近年に彼女はみずから自分の記憶をすべて書いたが、それはわたしの記憶と同じであったからである。彼女は昔ながらの鏡の元に座り本を読んでいた。わたしは部屋の別のところで読書をしていた。突然わたしは誰かが多量の豆を鏡に投げつけるような音を聞いた。わ

たしはその音がどこから聞こえたのか確かめるために、彼女を隣の部屋に行かせ、壁の一方をこぶしでコツコツ叩かせてみた。するとわたしが一人でいる間に、どしんという大きな音が頭に近い壁板と部屋の別の壁でした。その日あとになって、ある使用人は激しい足音が誰もいない家に駆け抜けるのを聞いたという。そして、その晩わたしと従兄弟ふたりが散歩に出かけたとき、彼女は木々の下の地面一帯が燃えるような光に輝いているのを見たという。

わたしには何も見えなかったが、やがてわたしたちは川を渡って川の縁に沿って歩いていった。その近くには人々の話では、17世紀の戦争で廃村となった所とその近くに古い墓地があった。そうこうするうちに、みんなは、水の流れが激しい川の上に不意に光が動いていくのに気づいた。それはこの上なくこうこうと輝く松明のようだった。一瞬のうちに、従姉妹は水の中に消えた男がわたしたちのほうに向かってやって来るのを見かけた。わたしは自分の目を疑った。不可能に思えたけれども、たぶん結局のところ誰かが松明を持って水の中を歩いていたのだった。だが一方で、わたしたちは7マイル離れたノックナリーで小さな光が赤々と燃えるのを見たのである。そしてその光は丘の斜面にそって上に動き始めたので、わたしは時計でそれを計った。すると5分間でその光は頂上に達した。わたしは山登りを何度もしていたが、それほどまでに素早い人間の足取りを見たことがなかった。

それからずっとわたしはゲール人の土砦<sup>どさい</sup><sup>9</sup>や妖精の丘を歩き回っては老女や老人に話を尋ねて回った。そして疲れ果て、自分が不幸せに思えるとき、トーマス<sup>10</sup>が見つけたような或る目的にあこがれ始めた。わたしは理性では信じることができなくとも、感情的には人が肉体や魂を連れ去られるということを感じた。それは何より、その地方の信仰によって証明されていた。あるとき、ローシズで三つ目の土堀にある石の通路に這うように入っていると、わたしの案内人は「大丈夫ですか」と、通路に入ったわたしに声をかけた。

そしてある夜、スライゴーからローシズ村近くに来た道中、7から8フィート頭上右側の緑豊かな斜面で、炎が燃え上がった。すると別の炎が突然ノックナリーからそれに応じたのだ。わたしは急いで目で追った。信じかねた

が、心の中では以前パリソデアで見た炎を再び見たのだとほとんど確信していた。わたしは折にふれて、あらゆる国々や時代で信じられてきたことならどんなことでも人は信じなければならないと語っていたが、同時に、新たな伝統を再び創りだすこと、また事実と認められるものだけを信じるようなことはやめて、(迷信と)証明するものが見つければ、それについては信じなければよいのだとも人々に語り始めた。

しかしわたしは、それにも関わらず、いつでも自分が密かに熱中してきたものを否定してしまうか、ジョークに変えてしまうほどの気持だった。わたしがダーウィンとハックスリーを読み、ふたりの思想を信じたとき、当節の第一人者ふたりがわたしと意見を共にしていたので、誰とでも議論しなくなった。

## XXII

### <1883年メトロポリタン美術学校>

わたしは既にハーコート街の学校に行くのをやめていた。そしてホースからラスガーへと一家は転居した。わたしはキルデア街の美術学校に通ったが、父はときどき学校へ来ており、わたしの師でもあった。美術学校の先生たちはわたしの指導をしようとしなかった。彼らは滑らかな表面と端正な輪郭を好み、それら以外のものはまったく認めようとしなかったからである。『円盤を投げる男』(紀元前5世紀ギリシアの彫刻家ミュロンの作)を描いたデッサンは、父が修正した後では、肩が素早い破線によってくっきりと目立つものとなった。そんなデッサンは教師たちにとって何の意味も持たなかった。そして、わたしの絵の大部分は父がやったことのすべてを誇張したものであった。実際はときどき、近くの生徒への競争意識から、わたしはまた滑らかで端正に描こうとしたものだった。ある日、わたしは自分の隣の生徒を手伝ってあげたことがあった。彼は石膏の果物のデッサンを描いていたが、芸術的な才能がないことは明確だった。感謝して、彼はわたしに自分の話をしてくれた。「僕は絵など好きじゃないんだけどね」と彼は言った。「ビリヤード



プレーヤーとしてはなかなかの腕前なんだけどね。ダブリンでは指折りの選手の一人なんだよ。でも僕の保護者が職業を身につけなければならないと言うから、僕が友人たちに試験に通らないでやれることを相談したところ、ここに入るはめになったというわけさ」。それはわたし自身のこの学校に入学した理由と大差がなかった。父はわたしがトリニティ・コレッジに進むことを願っていた。わたしの進学が難しくなったとき、「わたしの父も祖父も曾祖父もみんなトリニティで学んだのだよ」と父は言ったものだった。わたしは父に古典と数学の成績では、とても試験に合格できないということを言えなかった。

わたしの学友に不幸な「村の神童」がいた。彼がダブリンに来られたのは、情け深いコノート（アイルランド西部）の地主のおかげだった。彼は寝室の壁に釘打ちしたシートに宗教画を描いていた。残っているものでは『最後の審判』がある。その後、首の回りにヒナギクの花輪をかけて朝の学校にやってくる若者がいた。彼の名は詩人にして神秘家のジョージ・ラッセル（A. E.）である。彼はわたしたちがするようにモデルを描いたりしなかった。というのも、あるほかのイメージが必ず彼の目の前に浮かび上がるからである（わたしが覚えているのでは『砂漠の聖ヨハネ』がある）。すでに彼は自分の空想をわたしたちに語りかけていた。ある日のこと、彼は美術学校をやめると宣言した。彼のやめる理由は、「自分は意志が弱いから美術や情緒的な探求をしていると、ますます意志薄弱となるだろう」というものであった。

やがてわたしは、わたしたちの間では重みがある年長者の生徒たちと共にモデリングクラス（塑像製作）に入った。これらのなかにはジョン・ヒューズと、現在もアイルランドの彫刻家としてよく知られるオリビア・シェパード<sup>11</sup>がいた。最初に彼らが作業しているスタジオに入ったとき、わたしは驚きのあまり戸口で長い間立ちすくんでいた。部屋の真ん中には美しい上品な少女がモデルになっていた。そして男たちはみな、彼らの採光を妨げたことから、激しく、酷くその少女を罵って毒づき、彼女を思いつく限りの名で呼んでいた。彼女はその間中ずっと心を乱されることもなく勤勉に働いていた。

やがて、わたしの一番近くにいた男がわたしを見つけると大声で言った。

「彼女は全く耳が聞こえないから、わたしたちはあの娘が明かりを妨げると、酷い言葉で毒づき彼女をいろいろな名前と呼ぶのだ」。実際にはわたしはまもなくみんなが彼女に親切であるということがわかった。彼らはその授業が終わると、彼女の画板などを運び、その娘を鉄道に乗せてやった。

わたしたちは奨学金、絵画史の批評的知識、それに確立した批評基準を持ち合わせていなかった。或る学生が仲間の学生たちにフランスの挿絵新聞を見せてくれたことから、わたしたちは当時のロダンやダルー<sup>12</sup> による彫像と大仰なパリの記念碑を賛美することになった。だから父とその問題を話し合わなかったなら、わたしは他の学生と同様にそれらを区別することなく賞賛したであろう。仰々しいガンベッタ<sup>13</sup> 記念碑はわたしたちの間に大きな興奮を引き起こした。フランスの影響だけがわたしたちに与える確かなものであった。年長生の1・2名はすでにフランスへ行ったことがあったし、みんながフランスへ行くのを希望していた。イギリスのことについて何でも知っていたのは、わたしだけだった。いちばんよくできる学生はダンテを読むためにイタリア語を習っていたが、彼でさえテニソンやブラウニングを耳にしたことがなかった。だから、学校にイギリスの詩、とくにブラウニングの知識を幾ばくとも持ち込んだのは、わたしであった。ブラウニングの賢者のような雰囲気はわたしの心を動かし始めていた。わたしは熱心に勉強をしなかった。なぜなら、多くの創作をしたし、それによってわたしは疲労していた。ひとり周りの影響も受けずにいたとき、わたしは様式、ラファエル前派、そして詩と結びついた芸術に憧れ、何度もナショナル・ギャラリーに赴いては、ターナーの『金の枝』<sup>14</sup> を食い入るように見た。だが、たとえわたしにその方法がわかっていたとしても、臆病なわたしは、父のスタイルと周囲の人たちのスタイルから逃れることはできなかった。わたしはいつも、父が若い頃のスタイルに戻り、彼の画帳の中に残る、今は失った構図による絵を描くことを願っていた。その絵には、はっきりとしないが中世風の衣装を着た猫背の老人がひとりいた。その男は人々が眠るベッドが並ぶ秘密めいた部屋を通

てゆく。ひとつのベッドから少女が半ば立ち上がると、男の手をつかんで手にキスをしようとする場面が描かれている。わたしはその物語を忘れてしまっていたが、その不思議な老人と少女の姿の強烈さは子供時代と同じように鮮明に残っている。<sup>15</sup> 聖書の中だったと思うが、都市を救って姿を消し、二度とその噂を聞かなくなった男についての一節がある。別の着想では、その男は市場で自分の像を見てあざけり笑っているぼろを着た乞食となった。しかし父はこう言ったものだ。「わたしは目の前で見えるものだけを描いていればよい。本来の自分は意識しなくとも自然に表現されるので、（見えるものだけ描いても）実際とは異なるものを描くことになるのだ」と。わたしはときどき父と議論しようとした。なぜならわたしは、そうした父の周りの芸術家と父の哲学を、ヴィクトリア朝時代の科学が生み出した誤解と考えるようになったからであった。わたしは修道士にも似た憎しみで科学を嫌ったが、そこから得るものは何もなかった。そして、すぐにわたしが言ったことを取り消し、それを実際には信じていないふりをした。父は、ダブリンの法曹界の重鎮、大学の名士たちなど、数多くの肖像画を描いていた。また、顔立ちさえ気に入れば偶然の通りすぎりの人を無料で描いたものだった。しかしわたしはすべてに不満だった。心の中では、描かれるのは美しいものだけではないかならなと思っています。そして、美しいものとは、古のものと夢の中にあるものだけであると。あるとき、すんでの所で父と言い争いになりかけたことがあった。それは、今は紛失した父の最高傑作のひとつで、肺病の乞食の少女を描いた大きな水彩画についてのことであった。

アイルランド学士院（ハイバーニアン・アカデミー）にあるマネ<sup>16</sup>の信奉者が描いた、カフェの前に座る黄色い顔の売春婦は、わたしを何日間かみじめな気持ちにさせた。しかし、父の企画によってホイッスラーの絵画が持ち込まれ展示されたときには、幸せな気持ちになった。だが父が「灰色を配合してお前の母親を描くのを想像してごらん」と言ったときには納得できなかった。わたしは単なる<sup>リアリティ</sup>逼真性を好んでいるのではなかったが、創造（行為）とは熟慮の末になされるものと信じていた。それなのにわたしは父の模倣を

繰り返すだけだった。わたしは肖像画以外のなににも描くことができなかった。そして今日でさえ、わたしは常に人々を肖像画家の目で見えるのだ。どのような背景の前で彼らにポーズを取らせようかと想像するのである。一方で、わたしはまだまだ幼かった。時には、わざとらしい熱中ぶりで描くこともあれば、インスピレーションを受けたふりをしてみたり、また時にはハムレットを真似て気取った調子で歩いたり、店先のウィンドウで立ち止まって、わたしのネクタイが水夫のリボンの結び目のようにゆるく結ばれているのが映るのを見ると、絵の中の風に吹き飛ばされるバイロンのネクタイのようにならないのを残念に思ったものだ。わたしは現在と同じように当時も多くの想念があった。ただそれらの想念から、自分の人生に結びつくものを如何に選択すべきなのかわからなかったのだ。

### XXIII

#### <1884年ダブリンのアシュフィールド・テラスの家>

わたしたちが住んでいた郊外住宅は、その赤煉瓦が屋根のスレート色の縞でけばけばしく悪趣味に見える家であった。そこには至るところに敵がいるように見えた。一方には愛想の良い建築家が住んでいたが、もう一方にはいまましい太った女と家族が住んでいた。わたしの書斎の窓は彼女の家の窓と向かい合っていた。そしてある夜、わたしが原稿を書いているとき嘲るような声が聞こえたので、見ると、太った女とその家族がわたしの窓のところに立っていた。わたしには書いているものを演じ、夢中になってそれを大声で口に出す癖がある。多分わたしは手と膝をついていたか、あるいは深淵と想像するものに語りかけながら椅子の背から見下ろしていた。別の日、ある婦人に道を教えてほしいと頼まれたことがあった。わたしは思索に耽っていたときにとつぜん話しかけられたので一瞬間を置いているところに、隣家の女がそばを通りかかりわたしのことを詩人であると言ったので、道を聞いた婦人はわたしを蔑むように見て立ち去ったことがあった。似た挿話をもうひとつ。警察官と鉄道の車掌がぼんやりしているわたしを不審に思っていたと

ころ、わが家の使用人がわたしが詩作をすると言ったら納得してもらえたことがあった。「なら、いいのですが」と、わたしが泥濘とそうでないところを区別せず歩いてきた理由を尋ねた警官は言ったあと、こう続けた。「頭の働きをおかしくしているのが詩のせいなら、心配ないですね」。わたしは背がひよろ長く貧弱な身体に見えたのだと思う。というのも、近所に集まる子供達はわたしが通り過ぎると「おーい、死の王がまた来たぞ」と囃し立てたものだからだ。ある朝、父がアトリエに向かうとき、家主に会うとこんな話を始めた。「テニスンは爵位を与えられるほどの男だと思うかね?」「唯一疑問が残るのは、彼がそれを受けるべきであったかどうかです。アルフレッド・テニスンであることは、(そんなことよりも)ずっと素晴らしいことです」と父。沈黙のあと、「わたしが知る人はみんな彼が爵位をもらうべきではなかったと考えているよ」。そのあと意地悪く「詩が何の役にたつのかね」と家主は続けた。父はそれに対して、「詩はわたしたちの心に大きな喜びを与えてくれます。ですが、テニスンがもっと教訓的な書物を書いていれば、あなたの心にもっと喜びを与えたのではないのでしょうか」と言うと、家主は「それでもわたしは彼の本を読まないね」と応じた。夕方、家主との話の顛末に喜んで父は帰ってきた。だがわたしが理解できなかったのは、そんな見方を彼があっさりと受け入れ、家主と真面目に議論しなかったということだった。

詩人をこんなふうにししか見ない人々は皆、詩人といえ、平易で甘ったるい詩を書きお金を浪費し無一文になったあげく気が狂ったある白髪の老人のことしか思い浮かべなかった。通りでは誰でも知っている人物であるその老人は、鶏、ひなどり、鳥などを丸石大の石炭と一緒に飼っている、むさ苦しい借家地域に住んでいた。毎朝彼は一塊のパンを持って帰ると、その半分をそれらの鳥に与えるか、犬とお腹を空かした猫に与えた。彼は天井の真ん中に釘を打つと、そこから四面の壁に打ち付けた釘にまで無数の紐を伸ばした部屋に住んでいたことで知られた。こんなふう、自分がアラビア砂漠上のテントで暮らしている幻想を、その老人は抱いていたのだ。わたしは、彼の

ように、悪趣味な家とむさ苦しい地域から逃れることができず、陰口を耳にし、交わされる人目に気づきながら、そのような暮らしぶりを憎んだ。

数日間わたしの祖父が医者に診てもらうために訪ねてきたとき、わたしは家でその行状に驚いた。父は晩に祖父にクラーク・ラッセルの『グロブナー号の難破』<sup>17</sup>を朗読してあげていた。しかし医者は朗読するのを禁じた。なぜなら祖父は真夜中に起き上がると、「そう、そんなふうに万事起こったのだ」と言う、物語の主人公になりきり反乱を演じたからだだった。ちょうどわたしが自分の詩を身振り手振りで朗読することがあったように。

## XXIV

### ＜エドワード・ダウデンと父＞

わたしたちがダブリンに最初に到着してから、父はわたしを連れてときどきエドワード・ダウデン<sup>18</sup>に会いに出かけた。彼と父は大学時代の友人であり、おそらく再び旧交を温めようとしていたのだろう。ときどきわたしたちは朝食に招かれたが、その後、父は詩を一つ朗読するようにわたしに言った。ダウデンは励ます時も思慮に富んでいた。彼は誉めすぎることはなかったが、決して思いやりに欠けるわけでもなかった。そして彼は時々わたしに本を貸してくれたものだ。すべてにおいて趣味がよく、詩の価値が正当に認められる、秩序を守る富裕な家は、しばらくの間ダブリンをかなり良いものにしてくれた。そしてたぶん2、3年の間、彼は私の空想物語の対象であった。父はわたしほど彼に熱中していなかった。やがてまもなく彼がこれらの集まりに苛立つようになったのに、わたしは気づいた。ふたりが若いころ、ダウデンが創造的な芸術に身を捧げて欲しいと自分は願っていたと、父はときどき言ったことがあった。また父がダウデンの人生における失敗と思うものについても語ったものである。彼はラファエル前派について話すことで、慰めを友人である父の中に見いだしているのだと、わたしは思った。ダウデンは自分の素質を信頼していないし、彼は才能のない者の影響を受けすぎるなどと父は言ったものだ。あるいは父はダウデンの詩の一つ『隠遁者』を誉めて、

彼がどんなものを書いたか示そうとした。わたしは彼の詩の影響は受けなかった。というのもその暗いロマンティックな風貌にふさわしい過去を想像したからであった。（詩よりも彼の人物像に魅せられたという意味）わたしは彼の詩を厳密に読み、随所にスウィンバーンの修辞法の影響を受けていると思うと同時に、彼は不幸にも愛してはいけない人を愛したことがあるのだと信じた。わたしは美術を学ぶうちに、彼の好きな女性像が美術の或る流派の特徴なのだと知った。わたしは自分の空想を全く入れ替えて、ダウデンを賢者として考えるようになった。

わたしは一貫して哲学的問題に悩まされていた。わたしは美術学校で仲間の学生にこんなことを言ったりした。「詩と彫刻が存在するのはわたしたちの情熱を生き生きと残すためだ」。すると誰かが「もし情熱がなければわたしたちはもっと優れた存在ではなかろうか」と答えた。あるいは芸術は我々をより幸福に、もしくはより感受性を鋭くさせるが、その結果、我々をより不幸にするのではなかろうか。と、こんな問題に一週間も頭を悩まされもした。そしてわたしはヒューズやシェパードに「もしも芸術が人を幸福にするということを確信できなければ、わたしはもう書くのをやめるだろう」と、言ったものである。わたしがこうした問題をダウデンに語ったところ、彼はその問題を陽気なアイロニー（反語的な表現）で解決してくれた。彼は誰に対しても何に対しても、気さくで威張ることはなかった。

人が叙情詩を書こうとするならば、それは自然と芸術によっておよそ5、6個の伝統的な態度（ポーズ）から或るものに具体化されなければならない。例えば、恋人、聖人、賢者、好色家、あるいはただの人生を嘲る人などである。同時に、不幸の巡り合わせとは、世界について蓄積された表現をその人の前に明示することに他ならないのだと、わたしは学ぼうとしていた。そしてそれは知識となる以前の思想であり、本能のようなものであった。

父がダウデンのアイロニーを小心とみなしたとき、わたしは悩んだ。しかし何年かたった後でも、父の印象は変わらなかった。父はほんの数ヶ月前にわたしに手紙を書いてきた。「彼のアイロニーは司祭に話しかけるのに似て



いる。人は、彼が自らの禁欲を思い起こすことがないように注意しなければならない」。かつて食事の後、ダウデンはわたしたちに未発表の『シェリーの生涯』の何章かを読んでくれたことがあった。『鎖を解かれたプロメテウス』を聖なる書としていたわたしは、彼が読んでくれたものはすべて喜びであった。しかし彼がシェリーへの愛着を失い、シェリー家との昔の約束がなかったらその本を著さなかっただろうと述べたときには、わたしは落胆した。その本が出版されたとき、マシュー・アーノルドはありきたりな慣例表現や度の過ぎた褒め言葉を批判したが、それらは父とわたしにはダウデン自身が自分からシェリーへの共感の欠如を隠そうとする、臆病な男の矛盾とぎこちなさに思えた。ダウデンへの気持は揺らいだが、父にジョージ・エリオットを読ませられたとき、わたしは怒りと幻滅を感じ、父と口論し、あるいは半ば言い合いになりそうになった。わたしはビクトル・ユーゴーの小説すべてとバルザックの小説を2,3冊読んだが、エリオットを好んだ記憶はなかった。彼女は人が気持を高揚させるような人生の出来事すべてに不信感と嫌悪感を持っているようだった。だが、彼女はヴィクトリア朝中期の科学の権威によって、あるいは、当時の科学によって生まれた考え方によって、嫌悪感を強調する方法をよく知っていたから、わたしは嫌いなながらもエリオットの魅力から逃れることができなかった。どんなに自分の本能が美しいと知ろうと、エリオットの本が目の前にある限りわたしが美について本能的に感じてきたことに疑念を覚えてしまうほど、彼女の文学は説得力があった。しかし彼女のことを父に話すと、父は「彼女は美しい男女を憎む醜い女性なのだよ」と述べてエリオットをばっさりと切り捨て、『嵐が丘』を賛美し始めた。

つい先日のことだが、わたしは何通ものダウデンの手紙を入手して、ダウデンと父との友情が以前から反目していたことを知った。1860年代にフィッツロイ・ロードから父は、詩人のエドウィン・エリス、ネトルシップと父が作る同盟が「ワーズワースを嫌っていた」という内容の手紙をダウデンに送っている。それに対してダウデンは、別の週になると彼らに別の気分と嫌悪感が生まれることまで思い至らずに悩み、大げさで真面目な手紙を父に書き



送っていた。父は、ダウデンがあまりに知性に重きを置きすぎることに、同時にまさに価値ある教育とは単に感情を掻き立てるものであること、さらにそれは激しやすい性質を意味するものではない、と返事をしていた。「完全な情緒を備えた人間においては、ほんの少しの感情が湧いても、その和音が共鳴しあい調和を生み出すのである。興奮とは感情が十分ではないことを示しているものであり、一、二の和音が耳障りに振動し合うものなのである」。父は、仲間同士の議論、教訓でなく真理探求のため語り文を書く者たちの議論では過度に誇張した表現が当たり前の因習にとらわれない世界で生きてきたので、父はすでに、二人が二十代のときに、ダウデンには広い視野が明白に欠けていると考えていたのだった。

[注]

翻訳には *The Autobiographies* (Macmillan, 1955) を使用した。本稿は『幼年期と青春期の回想』の翻訳である。原題：*Reveries over Childhood and Youth* *Reveries over Childhood and Youth* は1915年に Cuala Press から出版された。1938年に『自叙伝集』は『幼年期と青春期の回想』と『垂絹のゆらぎ』の2編に、その他の4編が加えられて *The Autobiography of William Butler Yeats* となった。使用したのは、1955年に再版された *The Autobiographies* である。

1. 以前の部分については以下の論集に掲載した。  
W.B. イェイツ：『幼年期と青春期の回想』I～V 『国際文化論集』第17号  
1988年2月 桃山学院大学総合研究所  
W.B. イェイツ：『幼年期と青春期の回想』VI～XIII 『英米評論』第16号 2001年12月 桃山学院大学総合研究所
2. 1年住んだホース岬の Balcaddan Cottage から転居
3. 『プリンス・アサネイズ』1817年に書かれたシェリーの断片的作品 (*Prince Athanase*)
4. ローマの勇将コリオレーナスは策謀によってローマを追われる。敵将オーフィディウスと和睦を結びローマを攻めるも、ローマ側は彼の母親と妻を人質にとり応戦する。かれはオーフィディウスに公衆の面前で殺害される。
5. おまえたちの声は聞える、(水の面を渡る楽の音のように、) 甘く物悲しい響き

だ。『マンフレッド』第一幕第一場 小川和夫訳

6. アンドレ・マリー・アンペール1775-1836：フランスの物理学者
7. Henry David Thoreau (1817-62) による作品 *Walden, or Life in the Woods* (1854)
8. マタタビに似た効果があり、猫の好物といわれる。
9. Rath アイルランド地方の土砦。族長の家を囲んだ円形の堅固な土堀。
10. Scotland の詩人で予言者。Thomas of Ercildoune とも言われる。13世紀に実在したといわれる。妖精の国の女王と出あってから、予言能力を獲得する。
11. オリビア・シェパード (Oliver Sheppard 1865-1941) 彫刻家。Metropolitan School of Art でイエイツに出会う。彼の彫刻『クフリーンの死』は1916年の「イースター蜂起」を記念してダブリン中央郵便局に置かれている。
12. ダルー (Jules Dalou 1832-1902) 自然主義的、象徴主義的スタイルで人物像や記念碑彫刻を残す。英国に亡命するが、自然主義的手法は英国の彫刻家に影響を与えた。
13. レオン・ガンベッタ (1838-82) フランスの政治家：普仏戦争 (1870-71) で祖国の防衛を指導；第3共和政の確立に尽力；首相 (1881-82)。ダルーの製作による彼の記念碑がボルドーにある。
14. タナー (Joseph Mallord William Turner 1775-1851) 英国の風景画家
15. この小さな絵は行方がわかり、今は我が家に掛かっている。(1926年イエイツ自注)
16. マネ (Edouard Manet 1832-83) フランスの画家：印象派の成立に貢献
17. ラッセル (Clark Russell 1844-1911) 英国の作家。数年間水夫をした後に作家に転向。多くの小説があるが『グロブナー号の難破』(1875)で知られる。これは英国商船グロブナー号の悲惨な航海物語。残忍な船長に対して、第二航海士が主人公となる。
18. ダウデン (Edward Dowden 1843-1913) 英文学者、文芸批評家。トリニティ・コレッジに英文学講座を設置するため学科主任に任命される。シェークスピア、シェリーの研究で知られる。このポストを足場にダブリン知識人に影響力もつようになる。ダブリン神智学協会が生まれたのは彼の自宅においてだった。はじめイエイツは英雄崇拜に似た感情を抱く。父ジョンとは大学時代から生涯の友人。